

たなか のりゆき
田中 德行

以心伝心

●日本郵政グループ労働組合
(JP労組)・中央副執行委員長

一説によると「文字による記録を行う社会と、口承によって物事を伝達する社会とでは人間関係や物事の考え方、時間や世界に対する概念などが異なる」という研究があるようだ。歴史や出来事など正確に記録をとり保存するという発想が文字文化の根源だとすれば、記録の仕方によっても人や社会が影響を受けるとする考察もある。またエジプトのパピルスが粘土板に代わって記録に用いられるようになったことで人々の思考も軽くなったなどと論じられたりしている。

私の世代が就職し労働運動に参加したころは、紙と鉛筆の時代だった。職場で配布される日刊紙や周知文書はほとんどが手書きで、活字のものは和文のタイプライターを使用したものだった。当時はまだ携帯電話を持つことなど想像すらできなかった。固定電話が無い職員に対して、「シキユウシュッキンサレタシ」と電報を打つこともしばしばあったようだ。しかし、人間関係は、先輩後輩、上司と部下も含めて今よりも濃密であったことは多くの同輩や仲間が認めている。

そこでいきなり現代の話になるが、昨今のITの発達は目覚ましく、スマートフォンやタブレットなどの携帯端末によって、飛躍的にリアルタイムな情報交換が行えるとともに、膨大な記憶媒体としてのデジタル情報を保存する巨大なサーバーが世界中に出現し、誰もが気軽にアクセスできる時代になった。私は恥ずかしくてできないが一般個人のブログなどを公開し、双方向で意思疎通されている。

「ブログ更新・ブログ炎上」「Facebook・Twitter・Line・sns」・・・など言葉だけでもついていくのが大変である。もちろん、一方でデジタルデバインドと言われる情報格差によってデジタル化の恩恵を享受できない人々がいることも忘れてはいけないし、デジタルのみを賛美しアナログの魅力を否定するものでは全くない。

私は、身の回りにおいてデジタル化による情報過多の弊害を感じることや自らが記憶しておくべき事柄の選択や整理に苦痛を覚えることさえあり、贅沢な悩みかもしれないが頭を痛めている。自宅でもテレビを見るよりもパソコンの前でモニターを眺める時間の方が多くなった。しかし、意思を発信し伝える側としてのデジタル活用には遅れを取っており、まだFacebookやTwitterなどには参加できないでいる。

2013年9月に文化庁が発表した平成24年度「国語に関する世論調査」で、ふだん手書きで文字を書く方か、それとも書かない方かを尋ねた設問があった。

「いつも手書きをする」と「大体手書きをする」を合わせた「手書きをする」は、「はがきや手紙などの宛名」「はがきや手紙などの本文」で6割台半ば、「年賀状の宛名」で5割、「報告書やレポートなどの文章」で3割となっていた。過去の調査結果(平成16年度調査)と比較すると、四つの場合全てで、「手書きをする」を選んだ人の割合が減少しており、中でも、「報告書やレポートなどの



文章」で16ポイント、「年賀状の宛名」で15ポイント、それぞれ減少していた・・・とあった。敢えて白状すると「郵便」に携る労働組合の一員である私も直筆のはがきや手紙はほとんど書かなくなった。直筆の報告書やレポートはまさに皆無である。普段「手紙文化」を口にしながらもこの為体、アナログ的な文書（紙）や言葉（声）で意思疎通することを基本に労働運動を教えられたくせにだ。

日常の組合業務ではEメールによる文書の送受信が主流になった。確かに大量のデータが瞬時に送れるのはありがたい。しかしそこで問題なのは、送受信のみでなんでも「伝えたつもり」「理解されたつもり」になる傾向があることだ。先方が読んだのか、理解していただいたのか返信が来ても不安になることが多くなった。逆も真なり、先方の意思をきちんと受け止めたか、また取得したデータを保存しただけで「知っているつもり」「理解したつもり」のものがたくさんある。デジタル化で情報伝達の速度が飛躍的に早くなっても、所詮人間はアナログな生き物である。意思が伝わったか、受けとめたか、意識が共有できたかはその都度見極めなければならないことを忘れてはならない。

選挙対策を例に上げると掲げた目標と結果の乖離に度々愕然としてしまう。当然のとりくみとしてまず政治意識の高揚や意思結集に腐心した企画を展開するが、政治や社会に対する組合員の意識がその後の調査などで分析されるたびに毎度のことながら意識が多様化

していることや変化していることに驚きと無力感に襲われるのは私だけではないだろう。例えば組合員が政治に対し様々な思いがあったとしても少なくとも世間の投票率よりも組合員の投票率が大きく上回りたいと願い訴えるが、はかばかしくないのが現状だ。伝えたつもりで仲間が同じ思いでいるはずだと思い込むと大変な誤算になることが多くなった。

「以心伝心」とは文字や言葉を使わなくても、お互いの心と心で通じ合うことである。もとは禅宗の語で、言葉や文字で表されない仏法の神髄を、師から弟子の心に伝えることを意味しているそうだ。「こころをもってこころにつたう」と訓読するとなるほどわかりやすい。今までどれくらいそんな濃厚な関係を組織の中や自分の身の回りに作ってきただろうか。家族との関係も然り。以心伝心できる、ツーカーの仲間や友人を増やしていくことが人生を豊かにし、また、私たちの運動や組織、牽いては地域社会を強くしていくことだと思う。

「足を運べ」「まずよく聞け」「話せばわかる」「集い・聴き・話し・行動する」「もっと文章を鍛え、言葉を磨け」。思い浮かぶ教訓はアナログな言葉ばかり。メールより手紙、電話より直接会って話すことを励行したい。

以上は自分への戒めである。年頭にあたり、今年はあらためて労働運動の原点に立ち返り、初心を忘れず、謙虚に取り組みたいと思う。